豆っこ話

むかしあるところに、じっちゃとばばが、いであったわけだ。じっちゃまんだ、山さ柴切りに行って、ばばまんだほれぇ、家(え)にいだし、庭なか掃いたば、豆っこ一粒ふんだどぉ。半分種にして、半分豆の粉に煎ったわけだ。ガラガラど煎(い)って、はだいでいだば、じっちゃあがってきたわけだ。「じっちゃ、あのなんだで、隣さころし借りに行け」ってしたわけだぁ。「ころうし、ころうしって」行ったば、堰どぉーんとまたいだば、忘れて「えんとこ貸してけれ」て言ったわけだぁ。そごの隣の家でまだ、「ころしだばあっとも、えんとこ無(ね)え」ってしたわけだぁ。無(ね)って言うし、すぐ戻ってきて、「ばばぁ、えんとこだばあっとも、ころしねどやぁ」と言ったわけだぁ。「このじっちゃやぁ、ころし借りてこいってば、えんとこだって」。そのあと「いげぇ」って言ったわけだ。まぁんだ行ったたて、また堰どぉんとまたいだば、いっつに忘いて、まぁんだ、えんとこ貸してけれって、言ったわけだぁ。まぁんだ戻ってきて、なんだって言わった。また、ばばさしゃべったべぇ。「このじっこ」、なんぼ言ったってわがらねなぁ」って、「ま一回いけぇ」って言ったば、また「ころうし、ころうし」っていったば、また堰のところ跳(は)ねたば、またいっちに忘れて、また「えんとこ」になったわけだ。さ、戻ってきて「ばばぁ、またこんだでぇ」って。「ころしだばねえども、えんとこあるってばって、ほらぁ」って言ったわけだ。「このじっこぉ、なんぼか言ってわがねがぁ」って、「したらほらぁ、んが、ふんどしで、その豆の子、とおへじゃぁ」っていったわけだ。そのじっちゃ、屁ぶーとふって豆のこ、どぉんと飛んでいったど。それまんず、とっぴんぱらりぃ。

野村セツ（檜山　94歳）

（解説）

笑い話のひとつ。豆を一粒拾い、その半分を粉にしようとする。篩(ふるい)がないので隣の家に借りにやる。使いに行った爺さんが、篩と「えんとこ」を取り違えて借りられず、あきれた婆さんがやけくそに爺さんのフンドシで豆を通せと言うと、爺さんが屁を放って豆の粉を飛ばしてしまう。堰(せき)をまたぐと記憶が逆転するところや、婆さんがやけくそにフンドシを持ち出し、爺さんが屁を放って話が終結する。同じような話が『伝承文芸』に、富根や藤琴の話として収録されている。『通観』にも雄勝・平鹿・仙北・北秋田に広く分布するとある。それはいろいろな変形話がある。角館の話では、フンドシで煎った豆の粉を、夫婦の間に置いて寝たところ、爺さんの屁で飛んで婆さんの身体にかかり、それを隣家の犬がなめるという結末になっている。少しでも笑いを増やそうとした工夫であろうか。